



開脚レオタード

僕と淫らな母娘

高村マルス

挿絵／旅人和弘

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



第一章	覗かれた人妻	4
第二章	淫らなレックスン	35
第三章	筆下ろしもバレエで	83
第四章	濡れ乱れる新体操少女	126
第五章	母娘の淫靡なレオタード	173
第六章	母娘3P開脚合体	227

登場人物

Characters

麻田 佳那子

(あさだ かなこ)

人妻の元バレリーナ。結婚と同時に引退し、バレエ教室を営んでいる。夫と離婚しており、身体を持ってあまし欲求不満気味。

麻田 美香

(あさだ みか)

佳那子の娘で女子高校生。母親への反抗心から新体操部に入部しており、年齢に似合わない成熟したスレンダーボディを誇る。悪戯っぽい性格。

長谷部 裕志

(はせべ ひろし)

都内の私大二年生。バイトで塾講師を務めており、美香と知り合う。



「ああ、それを言う気？」

佳那子は眼がとろんとしてくる。どう考えても卑猥なやり取りを楽しんでいるとは思えない。

シースルーは全裸とは違う。裸が一〇〇%見えているわけではない。全裸同然だが、一枚薄物のベールに覆われていることで卑猥感が高まる。

佳那子は後ろから見ている裕志と眼が合うと、眼をつぶり、また眼を開いて、見て見てというような表情で誘惑してきた。

「股間は見る必要ないわ、身体全体の動きを見なさい」

佳那子は相変わらずバレエのレッスンにこじつけて言い、誘惑指導する。その言葉はシースルーレオタードのバックポーズという状態では、見るほうと見られるほうとの関係を一層意識させるどぎつい言葉に聞こえる。あまりにも女のシークレットゾーンがあからさまなのだから。

佳那子は四つん這いで膝を胸に引きつけ、上体をのけ反らせると同時に脚を後ろへ高く上げた。裕志が覗きで見たストレッチと同じだった。脚が上がったとき佳那子の左右の大陰唇がよじれて見え、黒毛とともにピンクの肉壁がはみ出してきた。

さらに驚いたことに、佳那子は脚を横に床と平行に開いていった。そんなことをし

たらシースルーだから股間が露呈してしまう。パカッと開脚して恥裂も口を開け、中身が赤裸々に披露された。

「先生、見えてますよ」

裕志は秘部をわざと凝視しながら言う。

「いやあ、言わないでえ」

佳那子は三十六歳とは思えない少女っぽい声で恥じらいを見せた。横に思いきり伸ばした脚は足先が床についてそのままの状態をしばらく保った。その間中、佳那子の恥裂は開き切り、二枚の薄い肉びらがペロッと舌を出すように露出していた。

「見えてます。佳那子さんのきわどいところが……」

裕志は佳那子のすぐ後ろで腰を屈めてまじまじと股間を見た。

「そんなこと先生に言っではいけないわ」

裕志は床に座ってじつくり眼と鼻の先にある佳那子のオマ○コを観察する。

「ああ、そんなに近くから見えてはだめえ。誰がそこを見ていいって言ったの。ストレッチのやり方を見ればいいのよ。シースルーを着てるのはストレッチで筋肉がどのよう動くかを見てもらうためなんだから」

佳那子は最初から筋肉の動きということを言うが、一度もそれを具体的に説明した

ことはない。秘部を見る裕志を咎めるが、そのくせ脚を閉じようとはしない。お尻のすぐ後ろに陣取って座った裕志のほうを振り返り、しつかりその眼を見てどこか泣きそうにも見える顔をして首を振っている。

「分かりました。先生の股間は見ないで脚の筋肉を見ます。ここですかね？」

「ひいっ！」

裕志は悪気を起こして佳那子の脚の付け根の太いすじを親指で弾くように強く押しした。佳那子は身体をブルッと震わせて刺激でお尻が上がってきた。脚は少し閉じて手をお尻のほうに伸ばした。

裕志が恥裂ギリギリのところを玩弄するのを邪魔してその手を引つ込めさせると、ふっと息をついてからゆつくり立ち上がった。

「ま、まだやってなかったアティチュードをします」

佳那子は裕志をバーの側に立たせて、片手でバーを持って身体を支え、脚を高く上げた。一方の手もカッコよく上げる。棒のようにまっすぐ伸ばした佳那子の美脚のふくらはぎが裕志の顔をすつと撫でていく。脚で何をしたいのだろうと勘ぐる裕志だ。

佳那子は裕志の正面で長い脚を自在に動かしながら裕志のシースルーレオタードがフィットした裸体を撫でていく。そして一步後ろに下がってその脚を下ろした。

バレエシューズの先がスツ、スツと裕志の勃起したペニスを正面からさすり始めた。それが目的だったのかと、裕志も納得した。

「あう、うっ、あうう……」

もう完全に勃起している。脚でしごかれる前から肉棒は勃^たっていた。バレエシューズを履いた脚の先端がグツ、グツと肉棒の胴から先っぽまでプッシュして、陰囊も少し撫でる。根元から亀頭まで足先でなぞり上げてきた。佳那子の薄目を開けた眼がじつと裕志の勃起した肉棒を凝視している。

「そ、それが、アティチュードですか」

「そうよ。アティチュードの練習はこうやって足先に意識を集中させて細かく動かす訓練が必要なの」

「はうっ」

裕志は尿道奥からジュツとカウパー腺液が湧くのを感じた。そこには理性も羞恥心も麻痺しかけている自分がいた。

「ちよつと見ててね」

佳那子は今度は裕志の前で脚を開いて立ち、上体を深く屈めた。尻と股間がシースルーレオタードにスケ放題。逆さになった顔が脚のコンパスの間から見える。

裕志は脚を閉じて立っている。佳那子がよくちと後ろ向きに歩いて裕志の肉棒にピタッと尻溝をくつつけてきた。

「そんな、僕のおチンポに先生のお尻が……本当にバレエのポーズなんですか？」

「これは創作バレエの一シーン」

「人妻と塾講師の秘め事ですか」

「まあ、上手いこと言うのね。そんなところよ」

佳那子がお尻を左右に数回振るようにして押しつけ、擦りつけると、互いのレオタードが多少邪魔はするが、極薄の生地のおかげで肉棒が佳那子のお尻の割れ目に挟まってきた。

「バレエはこうやって、腰を使ってヒップを上下させることも必要よ」

言葉通り佳那子は臀部をさかんに上下動させてくる。勃起した肉棒が佳那子の尻溝にすっぽり納まっているため、バレリーナの豊かな尻たぶの間でレオタードの生地を通してすりすり絶妙の感触をともなつて擦れていく。

裕志のペニスはすでに先っぽの包皮がくるつと剥けていた。やや敏感な亀頭がシールレオタードの少し粗い生地の密着を受けている。佳那子の尻溝が圧迫し、挟み、摩擦してくる。刺激の強い摩擦感と快感に巻き込まれていく。

「ああああ……バレリーナの足先は気持ちよかったです。カウパー腺液が出てきました。それにお尻に挟まって擦れると、もっとジュルツと出ます。はあうう」

裕志は快感でたまらず羞恥を含む喘ぎ声を漏らし、ちよつとマゾチックな気分になって故意に恥ずかしい言葉を口走った。そして思わず佳那子の堂々と張った臀部を両手で掴んだ。

「よけいなこと言わずに、そういうふうには腰をがちり掴むのよ。男性バレリーナが女性バレリーナを抱えるポーズはけっこう多いわ」

「うぉぁぁ……」

勃起した肉棒が佳那子の尻溝から恥裂までかなり速いペースでシュツ、シュツと擦りつけられている。もう恥裂内部の肉びらの感触まで龟头や尿道の膨らんだ部分で感じていた。

その異常なコキ方と実際に感じる快感の強さで、裕志はこれまで経験したことのない苦しいようなジンと染み渡るペニスの快感に巻き込まれてしまった。

もはやバレエのレッスンとは何の関係もない。裕志は美香の母親である痴女バレリーナの行為で舞い上がる。

射精しそうだ……と裕志は慌てた。いつそ射精してしまおうかとも思ったが、まだ

わずかに残っていた羞恥と痴女にこんな形で射精させられることへの抵抗で、佳那子の大きな尻を手で押して離れた。

「だめ、逃げないで」

佳那子は身体を起こし、くるつと裕志のほうを向いた。裕志が一步後ずきると、大きな魅惑的な眼を輝かせて迫ってきた。

「レッスンなのに勃起する不真面目な子はお仕置きよ」

佳那子が裕志の下半身へ手を伸ばしてきた。レオタードの上から無造作に肉棒を握った。

「おあつ、男のものを握られてる……」

興奮で勃起していた肉棒が今、佳那子の手の中にある。にんまり笑う顔はさらに悪女つぼさを増してきた。肉棒と顔を交互に見るその眼には卑猥な光が点じられている。佳那子が細い指先で亀頭をキュツとつまむものだから、裕志は思わず声が漏れて、腰が後ろにカクツと退けた。やり方がちよつと陰険で、もう一方の手で肉棒の根元をゆつくりつまみ、徐々に力を入れて少しつぶした。そのまましばらく亀頭をつまんで肉棒の根元をグリグリ揉んで刺激した。

「うう、そんな、変なふうにししないで下さい」

「変なふうって、どうやったって、変なふうよ。うふふ。いいからまかせなさい」
佳那子はその場にしゃがんで、そそり立った肉棒を眼を細めて見つめ、亀頭と根元をそんなに強くではないが、じわじわ揉んできた。レオタードのざらつく生地が過敏な亀頭海綿体に刺激を与える。

佳那子の指に徐々に力が入ってくる。

足コキ、尻コキもいいが、やはり指のほうが細かくツボを捉えて快感が強い。染み渡る快感のあまり肉棒がピクンと脈打って幸福感さえ感じた。

裕志は眼をばちくりさせて快感を噛みしめる。佳那子は下から裕志の顔を見上げてくる。裕志は自然に下を向いて佳那子と眼が合ってしまったが、感じている表情を見られると、ちよつと悔しい気もする。楽しそうに見られながらペニスを揉まれた。

やがて佳那子はすつと立って、裕志のシースルーレオタードの両肩をずらした。

「脱がすんですか？」

佳那子は聞いても黙って笑うだけで答ええない。もともとスケスケだから見えているのと同じこととはいえ、やはり全裸は恥ずかしい。

レオタードをしゃがみながら勢いよく下ろされると、勃起した肉棒がブルンと跳ねて出た。

「あつ」

裕志は声が漏れてしまう。佳那子は少し嘲笑を含んだ眼で生の肉棒を見ていた。

「ああ、僕のペニス、今、美香ちゃんのママの目の前にある」

卑猥に言うのと、自分の言葉にさえ興奮してくる。

「また、わざと恥ずかしいこと言う。あなた、知ってるわよ。覗きをしながらオナニーしてたでしょ」

裕志は佳那子に言われて驚愕の眼を見開いた。何故そんなことまで知っているのか——。それを聞こうと思つたが、あたふたして声が出ない。

佳那子は裕志に脚を上げさせてレオタードを取り去つてから、勃起した肉棒に手を伸ばしてきた。一瞬躊躇ちゆうちよする感じだったが、緊張と羞恥を誤魔化すような笑みを顔に浮かべて肉棒本体を握りしめた。握つた感触を味わうような顔をして裕志の顔を見上げた。

裕志は握られただけで快感に襲われて、ゾクツと下半身に震えが来た。次に佳那子はどうするのか期待して息をひそめた。

佳那子は馴れたもので尿道を指で圧迫しないように肉棒をしっかりと握つて、先っぽから根元まで前後にせわしなく揉みしごいた。今、美香の母親の鼻先に漲り勃つた生

の肉棒が突き出している。

佳那子は口を半開きにして、亀頭をねっとりした目つきで見ながら、最初はゆっくり、そして徐々に速度を増して前後に手でしごいてきた。

「うああ……お、お仕置きですか？」

「そうよ。自分の生徒の母親を覗いて写真撮って、オナニーする塾のアルバイト講師は許せないわ」

「じゃあ、バレエのエロレッスンで、手コキするママはどうなんですか？」

「うふ、うふふふふ」

佳那子はもう裕志を見上げて笑うだけ。ひたすら肉棒をしごき立ててくる。

両手を交互に使う。右手ですつと根元から上へ。すぐ左手で下から同じように上へすつと握って撫で上げる。それをくり返す。

もつと強く感じさせようというのか、肉棒を掴んでおいて五本の指で亀頭を撫で回した。

「どうなの、ほら、どう？ ピクピクしてる？」

ペニスを玩弄しながら裕志の顔を見上げて聞いてくる。

「そんな言い方、エッチなおばさんみたいだよ」

「いいの、おばさんなんだから」

佳那子は肉棒を睨んでしごく速度を上げてきた。

「も、もう、眼がとろんとしてエッチですよ」

佳那子は手コキすることに陶醉とうずいしている。

「それは、エッチな興奮する雰囲気できてるからよ。あ、赤くてテカテカ光ってカ
リが張ってるわ」

佳那子はさつきから口が半開き。涎よだれが垂れそうだ。感じているような顔をして裕志
の肉棒を手を大きく上下動させてギユツ、ギユツとしごいていく。

「あ、あ、あぁう」

声を漏らすのは佳那子のほうだった。

「何ですか、そんなエッチな声出して。自分が触ってるだけでしょ。触られてるんじゃない
なくて」

裕志は肉棒を揉まれて快感に巻き込まれつつも、佳那子に疑問を呈する。

「だから、おチンポをこうやって直じかにしごいて、雰囲気がついてもいやらしくなっ
てるからよ。あ、愛液が出ちゃった。い、いいわぁ……」

佳那子は切なそうな顔をして喘ぎ、裕志の肉棒をしごき続ける。



佳那子が起き上がってちよつと自分の手で濡れた恥裂を撫でると、その指を見て眼をつぶった。美香も羞恥と快感に翻弄され、裕志を潤んだ瞳で一瞥して立ち上がった。二人ともシースルーのレオタードの格好でバーに掴まった。

「バレエのポーズです」

佳那子が脚を後方へ垂直になるまで上げた。

「新体操のポーズよ……」

美香は母親に対抗して言い、同じように脚を後方へ垂直に上げた。愛液まみれで悩乱していた佳那子はようやく美香にニコリと微笑みかけた。

母娘が横に並んで脚を後方へ垂直になるまで上げ、股間をこれでもかと裕志のほうに剥き出しにしている。下着は穿いているが、それがクロッチにスリットが入ったセクシーショーツだから、かえって扇情的で卑猥だった。

「来ての合図ですね？」

「ああ、来てなんて言っていないわ。バレエのポーズを学んでほしいの。後ろから脚や腰を掴んで実感して頂戴」

「そんなことしたら、また僕のものがズボット入っちゃわないかと……」

「そ、それはあなたがわざとするからだわ」

裕志は勃起した肉棒をビンと斜め上方に漲らせて、佳那子の背後に立った。両手で佳那子の腰を捕捉し、肉棒を腫れたような濃桃色の秘穴に接触させた。

「はうっ……何するのよ。入れようとしてるだけじゃない」

佳那子が後ろを振り返って声を荒げた。髪は後ろで丸めているので顔にかかることなく、悩ましい表情がよく分かった。

「すみません。でも、佳那子さんが色が色っぽいからつい……」

裕志は佳那子の腰を捉えていた手で、まずレオタードの股ぐりを横にずらした。

勃起している肉棒を押し下を向かせ、佳那子の股間に差し込む。肉棒はいわゆる素股の要領で露出した恥裂に接触した。

裕志は佳那子が言ったバレエのポーズの脚や腰の状態を実感するために、垂直に上がった脚に自分の身体を押しつけた。そうして完璧な流線形のふくらはぎを撫でたり、クリリと締まった足首を握ったりして味わった。

そのとき佳那子の股間に差し込んだ肉棒は、恥裂にくつついた感触と卑猥感でさらに充血勃起した。佳那子のお尻のたまらない肉の弾力を下腹に感じ、肉棒に大陰唇を感じた。

「眼と眼を合わせて下さい。佳那子さんのすべてを感じたいです」

裕志は佳那子の見開いた眼を覗き込むように見て言った。肉棒を手で持って秘穴に挿入しようと思ったが、あくまでバレエレッスンを装った。

尿道口からカウパー腺液が漏れている。裕志が下をよく見て、亀頭が秘穴に接触するように持っていく。蜜液で佳那子の秘穴を濡らした。

「アアアッ！」

裕志は佳那子の乳房をギョツと掴むと同時に、肉棒を前進させていた。パンパンに膨張した亀頭が秘穴にちんにゅう闖入した。

さらに押し込む。肉棒全体がズッポリと膣内に納まった。

「はううーっ……ふ、深いわ……」

少し肉棒を引いておいて、もう一度グイと一突き。

「ヒンンッ——」

佳那子が快感の鼻声を響かせる。肉棒は濃厚なピンクの膣奥へと呑み込まれた。

裕志のペニス括約筋の締めまりによって痛痒いほど絞られていく。

「これだよ。やっぱり凄い……」

今、二穴を取り巻く「8」の字筋が収縮して、裕志の肉棒を卑猥に愛するように締めつけている。バレエのつま先立ちで鍛えられた佳那子の収縮力だった。

「おうあああああつ……」

膣壁が吸いつき、蠢き、魔性ましようの括約筋が締めつけてくる。

「ああー、ママがバレエのポーズでバックから挿入されてるう……」

美香は佳那子と同じように脚を頭につくまで上げていたが、その脚を下ろして、佳那子と裕志の結合にしばらく眼を向けた。そして見たままの光景を口にした。

「美香ちゃんママは、今、僕のおチンポを本気で締めつけて離さないよ。分かるかい？」

「いやあ、ママ、先生のを締めつけたりしないでえ」

単にブスリと挿入しただけなのに、佳那子の膣壁は亀頭周囲の環状溝にまでまとわりついて密着していた。さっきのマットでの悦虐行為で、佳那子の淫欲が噎せ返って肉壁が蜜を分泌しながら蠢いていたからだった。

「美香ちゃん、あなたも男のものでされてるうち、分かるようになるわ。アソコはひとりでに締まるし、自分でアナルといっしょにキュツと締めたくなくて、それも自然の現象だつてことが……」

裕志は腰の動きを休止し、力を溜めてから一気に挿入した。

「ひんぎやあああ……あ……あ……つ！」

亀頭が子宮を腹腔に向かって押し上げた。

グッ、グッと腰を前後に細かく動かす。肉棒が腔内で位置を変え、亀頭が子宮口に入った。

「この間、美香ちゃんはママとどっちが好きって聞いたけど、ハメくらべてみて、どっちのおマ○コが気持ちいいかで決めるよ」

裕志は卑猥で悪辣な言葉を吐くと、佳那子から肉棒を抜いて美香に鋒先を向けた。

「バレエのレッスンだってママが言ってるわ」

「うっ、そうか……じゃあ、ママと同じように美香ちゃんの新体操ポーズをよく味わうために後ろから抱きついてみよう」

「ひいっ」

裕志は肉棒を直立させて、美香の背後から手を回して乳房を鷲掴みにした。

「はあうう！」

美香がひととき大きな声を迸らせた。後方百八十度開脚で股間が裕志のほうを向いて開陳されている。レオタードのクロッチを指で引っ掛けてずらすと、秘穴が露出した。

裕志はそこへブスリと、いとも簡単に肉棒を挿入していった。

「動いちゃ、いやああ。奥まで来てるう……ああ、だ、だめええーっ」

「ほら、ほら、ほらああ！」

裕志は美香の可愛い啼き声を聞きながら、自分で自分を鼓舞するように掛け声まで入れて肉棒を抽送した。

「安全日だから、中出しOKだって？」

「ああう、ママがその日を聞くから教えたら、こうなったの」

「困ったママだね。それに、安全日なんてものは医学的にはないそうだよ」

裕志は乳房を揉み、目の前で垂直に上がっている美香のスレンダーな脚を撫でさすり、ふくらはぎに頬ほお擦りした。

ズンズンと美香の熱い肉腔に挿入しながら、裕志は横から佳那子の眼差しをひしひしと感じた。

しばらく生の肉棒をぬかるむ体内に嵌め込んで、ズルツと抜き、再び佳那子の背後に立った。

すると、佳那子がもの欲しそうな眼で裕志を見た。

裕志は一気に濡れそぼった淫腔に肉棒を挿入していった。

「はうああああ……今、美香の身体に入ったおチンポがあ……凄いです……」

佳那子は前にも四つん這いでやったように、挿入してくる裕志のほうへお尻を突き

出して肉棒を迎え撃った。

ズブッと深く肉棒が没入する。それをくり返す。

快感のあまり膣が発情して収縮し、裕志の肉棒を締めつけていく。

「クイッ、クイッとよく締まるオマ○コだな……」

ムッチリした太腿を掴む。背後の裕志を振り返る佳那子の頬にキスをして、破裂しそうな勃起ペニスを打ち込んだ。

肉棒は膣の底に先端がつかえて行き止まりの肉壁を奥へと伸ばし、ギュギュッと淫膣の括約筋で絞り込まれた。

裕志はしばらく佳那子の熱い体内で肉棒を暴れさせ、その膣壁の絞り込みを味わいつくした。

ズルッと肉棒を抜いた。

「あうん！」

佳那子は秘壺から裕志の肉棒が抜けていくと、鼻から情けなくなるような悩ましい声を響かせた。括約筋で愛するように肉棒を締めつけて、膣壁との摩擦が強かったようだ。抜けていくときカリで肉壁を掻き出された。

裕志もペニスに膣壁が擦れて、その快感でゾクゾクと身震いした。

肉棒が抜かれると、佳那子の淫靡がポカアと濃桃色の口を開けて、またゆっくり閉じていった。

「やあん、ママとわたしの間を行ったり来たり……入れ心地をくらべて楽しんでる」
美香は自分の手で佳那子と同じように垂直に上げた脚を持ってポーズをキープしている。

「だから、さつきママとハメくらべてみるって言ったろ」

裕志は美香の背後に陣取った。肉棒が好色そうに赤黒く聳える。狙うのは言うまでもなく美香の秘穴である。

「ああう、これが二人とも満足させる責任を果たすことなのお？」

裕志は顔に薄笑いを浮かべるが、美香の問いには応えずに秘穴を再び貫こうとした。「美香、女は優しくされるだけではダメ。いやらしく猥褻に扱われて、初めて妖しい色気が出るわ。それをやるのが男の人の役目よ」

佳那子が淫母として娘に教え諭そうとする。裕志は佳那子らしい言い方だと感心した。

織毛が大陰唇周囲をまばらに縁取ふちどっている。織毛の間でサーモンピンクの肉溝が挿入をおねだりして淫らかな口を開けていた。

「愛液で濡れて、光ってる……」

裕志は美香の腰骨と上げている太腿を掴んだ。

美香の下半身を捕捉して、肉棒を勢いよくズンツと嵌めた。

「あうわああっ！」

美香の上半体がガクンと揺れた。

裕志は佳那子に行ったのと同様、力を入れて美香へズボズボ抽送していく。

卑猥な音を上げながら、激しく抽送する。ペニス全体が肉襞に擦れた。

「ふふ、美香ちゃんはママにくらべて穴がちよつと小さくて、襞は細かいような気がするなあ」

「はうわあああ、お、お願い、もうくらべるようなこと、言わないでえ」

美香は嫌がっているように見えるが、本音はどうか分からない。涙声になりながら、羞恥と快感のわななきを披露した。

「ち、膣襞がまとわりついて……母娘ともハメ心地満点の名器だ。僕がやった女は美香ちゃんとママしかいないけど……むうう、きつとそうだよ」

佳那子が裕志にお尻を押しつけるのを見ていた美香は、バーを手で持って身体を支え、抽送に合わせて尻を肉棒のほうへ押しつけた。

肉棒の固い胴が美香の赤く火照った淫膺をえぐるように擦りながら呑み込まれた。出し入れする肉棒は愛液でヌラリと光っている。

裕志が抽送の速度を上げた。肉棒が秘穴で抽送されるたび、ブジュツと淫靡な音を立てる。それだけ愛液がしとどに溢れているのだ。

裕志は亀頭が秘穴から出るところまで肉棒を引き、そこで力を溜めて動かさず、また一気に子宮まで突っ込んだ。

「ひゃあうううーっ。そ、そんな、わざと強く奥まで押し込まないでえ」

美香は膨張した裕志の亀頭で子宮口を押しつぶされていた。

「そ、それは、前やったときも同じだったろう……」

裕志は美香の肉襷と子宮口の感触で蕩けてしまいそうになった。

射精へ向けてズボズボと力まかせに肉棒を抽送した。

「イクイク、イクウ！ ああ、イクウーッ！」

美香の膪肉が締めり続ける。しなやかで美しいスレンダーな肢体が電気を流されたように強張った。

裕志のペニスから美香の肉内に、ビュビュツと精濁液が迸り出た。

発射しながら美香から肉棒を抜いて、間髪容れずに佳那子の秘穴に嵌め込んだ。

「はううーっ！」

佳那子に再び裕志のペニスが結合した。

「おうっらあ……」

裕志はあらん限りの力を腰に込め、反動をつけて肉棒をズンと熱い淫腔へ没入させた。

「イクッ、クッ……イクウウウ……ッ！」

佳那子が咽喉のどを鳴らす。

「おうぐううっ」

裕志は粘液まみれの佳那子の膣奥に射精した。

さらに深く突っ込んで子宮口に亀頭をめり込ませる。

子宮頸管内で、ドビュルツと熱射精した。

「ヒイイ……イ、イクッ、イツクウーッ！」

佳那子が白眼を剥いてわななき、淫らな白い肉房と肉尻を痙攣させた。

佳那子も美香も、直接裕志の熱液を体内で受けて弓なりにのけ反り、快感が脳天まで突き抜けて果てた。

二人は納得して体内に精液を注入された。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!